

朝日 歌壇 俳壇



＜日曜日のプロローグ 04＞ junaida

俳句時評 語りたい俳人

董振華編『語りたい俳人 師を語る友を語る』(上下巻、コルサック社)は、一九八〇年以降に逝去した俳人二十四人を取り上げ、その弟子や句友の談話をまとめたもの。作家論としても興味深い。俳句はわずかに十七音。作品の読みは読者に大きく依存する。その点、弟子や句友が何を語るときは作者と読者の近しさは、俳句を深く鑑賞する上で有利な条件である。

たとえば、飯島晴子の「月光の象番にならぬかといふ」は、アンリ・ルソーの絵を思わせる奇想の作。晴子を語る奥坂まよによれば、この句の契機は、その日の吟行で動物園の象の飼育係を見かけたことだった。あるいは「八頭いづこより刃をさす」という句は、奥坂が「この句は実は八岐大蛇なんですね」と言ったら、作者の晴子は「そうも読めるんですね」と喜んだという。

また、飯島晴子の「月光の象番にならぬかといふ」は、アンリ・ルソーの絵を思わせる奇想の作。晴子を語る奥坂まよによれば、この句の契機は、その日の吟行で動物園の象の飼育係を見かけたことだった。あるいは「八頭いづこより刃をさす」という句は、奥坂が「この句は実は八岐大蛇なんですね」と言ったら、作者の晴子は「そうも読めるんですね」と喜んだという。

◆5月4日の歌壇俳壇面は休載します。

第24回俳句四季大賞・第13回俳句四季新人賞・第12回俳句四季特別賞 東京四季出版主催。大賞は東京都の中村和弘さん(83)の句集「荊棘」(ふらんす堂)。新人賞は和歌山県の山海和紀さん(35)の「火は蛇」(30句)が選ばれた。特別賞は兵庫県の森田純一郎さん(71)の句集「街道」(東京四季出版)。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8861 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。

時間とは死との間合いで変速し速くは遅くは早く (筑紫野市) 二宮 正博
フランシスの話を誰ともしなかった 世界がこんなに酷い三月(東村山市)さいとうすみこ
コリー・ブッカー長演説の締めは良し「左、右ではない! 正しいかどうかだ!」 (八尾市) 宮川 一樹
いつもより一つ手前のバス停を降りて今年の夜校に逢う (市川市) 松丸 史佳
つちふるの予想通りに生駒山稜線霞みハルカス煙る (東大阪市) 川田 聡子
タマノホシザクラ六輪敷えし日多摩には多摩の開花宣言 (八王子市) 額田 浩文
「お母ちゃん、お水、おいしいねえと弟死ぬ原爆八〇年の広島的女性(生駒市) 辻岡 英雄
知ってるよびまる子ちゃんやってたカセットテープ見て生徒言う(岡崎市) 戸田 陽子
わが歌に聞かないがシュレッターの故障なおせる頼もしき妻 (仙台市) 沼沢 修
3・30の歌壇丁寧に切り取りぬ二度と見られぬ「馬場あき子選」 (一宮市) 園部 洋子

【評】二宮さん、歳によって、時間の長さが明らかに違う。それを「死との間合い」に逆比例と捉えたところが見どころ。さいとうさん、ピアフラの飢餓に抗議して焼身自殺をした「フランシスの場合」。今の状況でその話をする気にもなれない。

喜声あげ一気天を閉じてゆく わたし今こじっブラインで (松本市) 齊藤 里美
パストの検査をしつつ見窓の夾竹桃よ万博のころ (綾部市) 出口真理子
りんどうになって首振りつづけた自分を責める遺族の陰で (長崎市) 佐々木泰三
朝日さす夫の無事見ゆお風呂場のガラス戸の肌のさへ色 (彦根市) 吉田 千代
新しいクラス名簿の貼り紙を見にだけ行く日まわりだす地球 (富谷市) 川村 空也
最近の姉は毎朝コーヒを飲む決心を固めるように (富山市) 松田 わこ
曇天に親の介護の話尽きた静かなり前方後円墳 (神戸市) 高寺美穂子
キッチンで沐浴させる若夫婦にぎやかな声湯舟に届く (栗東市) 西田 信宏
「可愛いね、チョー可愛いね」といながらあつという間にホタルイカ喰う (鎌倉市) 佐々木 眞
遙かなるピサの斜塔の角度にてユリノキに添ふわたしの背骨 (取手市) 近藤美恵子

【評】1 首目、空中を滑り下るジップラインとジッパーを重ねた楽しさが光る。2 首目、行けなかった70年の大阪万博。悔しさが夾竹桃に映る。5 首目、クラスが決まり世界が動き出すのだ。8 首目、台所で沐浴する赤ん坊は家族の中心だ。

満員のハローワークの座席には凝縮された人生がある (大阪市) 古城 えつ
さりげなく別れる人の数多い転勤時期の学校の中 (日南市) 宮田 隆雄
熊野灘に白くかがやく水脈のこし初ガツオ追う釣り舟二艘 (東大阪市) 池田 健一
ガザ取材ジャーナリストの死に者二百人超えと今日の報道 (亀岡市) 俣野 右内
フランスの鮮魚市場が採り入れた「活メ」という日本の手技 (横浜市) 毛渥 明子
梅洗へ梅洗へと幾たびも言ふさつき食つたばかりなのに母は (小美玉市) 津嶋 修
通勤の窓に桜と新幹線たまらなく旅人になりたけ (富山市) 松田 梨子
水漏れを増して流る信濃川甲斐も千曲も雪解け進む (柏崎市) 友田富士夫
消灯の早い病室にぎやかなラジオが聞え少し薄める (東京都) 夏目 そよ
友達の手先を見て感嘆す三分ほどで似顔写し出る (新潟市) 栗原 肇

【評】第一首、最近、職を求める中高年の人が多いと聞く。下句に「人生」という語を出して、説得力のある一首に仕上げた。第二首、毎年、転勤時期の公立の学校でかならず見られる風景。第三首、二隻の舟の鮮明な航跡が印象的。

本を読みネットを開き旅をする知る喜びの中で老いたし (大田市) 安立 聖
国境を越えて連なる草原にドイツの羊フランスの羊 (久留米市) 橋口 久美
パンドラの匣を開ければネタニヤフ、プーチン、トランプ 連るか希望 (名古屋市) 浅井 克宏
哲学の道も吉野も行けませぬあなたがたらないお花見なんて (豊中市) 夏秋 淳子
鉢植えの梅を下ろせば土吸いて花多く咲き夫十三回忌 (飯田市) 草田 礼子
入学と昇進祝い孫と子のため新札を求めぬ弥生 (観音寺市) 篠原 俊則
少し前まであたりまえだったことホームドアなく風圧が怖い (東京都) 上田 結香
失明のわれにも出来る事ありて妻代筆の短歌投稿 (豊岡市) 玉岡 尚士
ガラケーの頃は良かりき今はもう時間があればスマホ見てをり (吉野川市) 喜島 成幸
やまきくら花から葉へと季うつり卵を抱くや雉子の声す (大分市) 岩永 知子

【評】1 首目、プラス思考で老いの日々を生きようとする姿勢に心打たれる。2 首目、欧州の旅で出会った爽やかで美しい風景。3 首目、世界を不幸にしている人物たちがいることへの憂い。4 首目、哲学の道(京都市)も吉野山も、桜の名所。